

自然ウォッチングの記録

- 鳥 メジロ、シジュウカラ、ヤマガラ、コゲラ、シロハラ、ジョウビタキ、ヒトリ、ハシブトガラス、ノスリ、マガモ、ハシビロカモ、ホシハシロ、キンクロハシロ、ミアイサ、カイツブリ、カウ、ダイサギ、アオサギ
- 花 シキザクラ、サザンカ
- 実 モチノキ、クマガイノモチ、ソコ、ウメトドキ、ヒサカキ、センリョウ、キミノセンリョウ、マンリョウ、ヤブコウジ、ナンテン、チバナトドキ、ムラサキシキブ、ガマズミ
- 他 シモバシラの氷の花、ウスタビガの繭など



アメリカハシバミ

ウォッチングの中から

快晴のウォッチングとなりました。冷え込みが強かったため、シモバシラの枯れ茎にはそこから出た氷の花がしっかりと残っており、みんなで楽しむことができました。

つつじ橋付近ではシキザクラが青空に映えて見ごたえがありました。いつもは11月が花の盛りなのに今季はな



ジグモの巣

ぜかずれているようです。

岩石園では、マグマ由来の火山岩の勉強を少しだけしました。

写真は、展示館裏のアメリカハシバミとその近くにあったウスタビガの繭、水生園で見つけたジグモの巣です。



ウスタビガの繭

なるほど植物園

湿地の若返り②

A 湿地の復元めざして調査を始めた1995年は、湿地と周りの樹林との境目が曖昧で湿地へは南側の斜面を下って入り、ノイバラに引っかかりながら藪こぎ状態で歩いたものでした。現在の出入口は、調査の結果決められたものです。

湿地全体は皿を伏せたような形状で、両端が沢になっています。乾いているような中央部も、少し掘ると水がしみ出してきたのを憶えています。とりあえずその年から樹木の伐採を始め、同時に水質・植生調査、県内の湿地の視察、資料収集などを1996年にかけて行いました。草花ではサギソウ、ホソバリンドウ、ウメバチソウなどの生息が確認されましたが、イシモチソウが確認でき



たのはその翌年でした。あのやぶ状態で細々と生き残っていたのが明るくなって一気に復活してくれたのです。

調査、学習等を経て、湿地の管理方針は「冬場の枯れ草の刈り取りと搬出を原則とし、外部からの植物移入は行わない」としました。じつは、この「枯れ草の刈り取りと搬出」が管理の肝でした。どういうことかと言うと、湿地の遷移＝老化とは土壌の富栄養化と同意で、湿地若返りの唯一の方法は富栄養化した土壌から栄養を抜いてやることだったのです。

そのためには表層の腐植土を剥ぎ取ってやる方法が即効的なのでしょうが、人力では大仕事になりまた作業方法によっては残したい種もいっしょにリセットされてしまいます。それに対し、「枯れ草の刈り取りと搬出」は即効性では劣るものの作業はそれほど大変ではなく、湿地にやさしい方法でもあったのです。以下次号です。

(高谷)

この情報紙のメール配信(無料)ご希望の方は、愛知県森林公園の公式サイトを開き、【コンペイトウの森通信】のバナーから申し込みください。

発行 2026. 1.10
愛知県森林公園指定管理者
㈱ウッドフレンズ0561-53-1551